

資料1 令和4年度 「指導の重点」分野別まとめ

(1)自らの命を守り抜く安全・防災・健康教育	成果と課題	改善策
① 感染症、食、アレルギー、飲酒喫煙薬物乱用防止をはじめ、情報進展に伴う事件・事故、防災、環境保全、国民保護等、健康・安全に係る情報を的確に判断し、主体的に行動する実践力を育成する。 特に、感染症の感染及び拡大のリスクを低減する環境づくりと指導に家庭と協力して努める。 「感染源を絶つ」毎朝の検温、健康観察 「感染経路を絶つ」手洗い徹底、マスク着用、近距離・大声での会話禁止、消毒・清掃 「抵抗力を高める」十分な睡眠、適度な運動及びバランスの取れた食事に係る指導 「三密を避ける」適切な換気	【アレルギー対応】 ○校務員・生徒本人・給食指導教師のトリプルチェックを継続して行っている。 ○除去食生徒一覧のチェック（毎朝学年で）を行っている。 ●ファイルの受け渡しの遅れなど、ヒヤリハット事例があった。 ○各学年毎にエビペン研修を行った。 【給食】 ○栄養教諭による食育の授業を通して、将来に渡って食に対する意識を高く持つための機会を設けることができた。 【健康教育】 ○性教育・薬物乱用防止教育・喫煙防止教育・歯科講演会等学年に応じて必要な健康教育を実施した。保健師や地域の医師、学校医などに来ていただき講演会を実施することができた。様々な関係機関と日頃から連携し、指導や助言をうけられた。 【感染症について】 ●朝の健康観察や冬場の換気が徹底されにくい。	【アレルギー対応】 年度初めは特に気をつけてチェックを行う。日々の給食指導の際に、除去食品の個数・物が間違っていないか、正しく配膳されているか、確認を徹底する。 【感染症について】 生徒自身で健康管理ができるよう継続的指導。→G o o g l eを使った健康観察への移行検討。 上部の窓を対角線状に開け、寒くても工夫しながら感染症対策を行う。
② 時間厳守や体幹保持など「きびきびした生活」、換気、環境美化整備など「すがすがしい環境」、挨拶など「さわやかな仲間」をはじめとして、安全安心で規律ある教育環境を確立する。	○生徒会の予算協力を得て、必要な清掃用具をそろえることができた。 ○大掃除の時、整美委員会の生徒が、各学年の道具について責任を持って準備・片付けを行った。 ●教師が不在の日なども、生徒たちだけで掃除ができるようになること。 ●トイレ掃除について、生徒の掃除だけで1年間過ごすことは衛生的に課題がある。	生徒が自主的に清掃に取り組むように班編制や方法を工夫する。
③ 学校安全マニュアルに基づき安全点検の徹底や体育授業等におけるきめ細かい生徒観察により事故の未然防止を図るとともに、定期的な緊急連絡体制の確認により、事故に即時即応する。	○毎月欠かさず、校内の安全点検に取り組み、安全な環境を保つことができた。各場所の担当者が自らがデータの入力してもらい安全点検担当で確認をする形式をとった。緊急性を要さない内容については担当者で修繕してもらうように促した。 ○毎月の定期的な点検の実施により、職員間での共有が図れた。 ●修理・修繕する箇所が多く追いつかない。	緊急性を要する箇所やそうでない箇所の振り分けを徹底する（安全点検担当） 教職員で直せるところは直す。
④ 体育・スポーツ活動の楽しさや喜びを味わわせることにより、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する。	○歯科講演会・喫煙防止教室・性教育・薬物乱用防止教室・心肺蘇生講習会と計画的に実施し、健康について興味関心が持てるように取り組んだ。 ○コロナ禍で制限がある中でも、生徒が主体的に活動できるように、授業内容を工夫した。	専門性の高い外部人材を活用した授業の継続
⑤ 家庭や地域、関係機関と連携した防災防犯体制を確立するとともに、危険箇所の把握・改善や予告なし避難訓練、自転車点検・自転車保険への加入等を通して安全に対する意識の高揚を図る。	○避難訓練を年間3回実施。（抜き打ち避難訓練を含む） ○消防署・警備会社など関係機関との通報訓練を、避難訓練と同時に実施。 ○大規模改修工事中で、いつもとちがう避難経路であったが、生徒自ら考え避難することができた。 ●抜き打ち避難訓練が実施期間が1週間と短いため、予想ができてしまう。	抜き打ち避難訓練の予告期間を1か月にするなど、もっと本番に近い状況をつくる。
(2)誇りを感じる学校・学級集団	成果と課題	改善策
① 学校生活の課題について、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、話し合い、合意形成、意思決定して改善することを通し、課題解決力や人間関係形成・社会参画する力を育てる。	○コロナ禍の中で、多くの制限がある中、思い通りの活動ができなかったが、工夫をして最善に取り組めた。	ICTも活用しつつ、効果的な学級活動を計画する。
② 生徒会・教科係が生活・学習の諸課題について協力・協働して改善する活動を通して、学校内外の生活・学習マネジメント能力を育てる。	○学級役員や教科係を通じて、呼びかけ、連絡などを行い、生徒自ら動いていた。 ○生徒会が中心となり、球技大会を企画・運営して学校生活の充実に努めた。	学校生活をより充実したものにする取り組みを、生徒会が中心となって考え活動する。
③ 学校行事の選択と集中を通して、集団への所属感・連帯感を高めたり、高い目標をもち、自己を生かし、協力して課題解決したりする主体的、実践的な態度を育てる。	○学校行事など、本来は『ゼロベースからの構築』を毎年考えるべきであろうところではあるが、コロナをきっかけとして大きく見直すことができた。当日の内容やプログラム、練習の在り方など、密を避けることや時間を削減することに対しては、十分な成果があげられた。 ●体育祭や文化祭が学級への所属意識や協力協働姿勢を高めることに寄与していたこと、達成感や充実感を抱かせていたこと、演劇などを通して他者理解を促していたことなどを考えると、学活や総合などを始めとする他の活動を通して味わわせるような教育活動の計画が必要。	各教科がそれぞれ単独で年間指導計画を立てるのではなく、他教科との横のつながりを意識した『タイムリーな指導計画』を考える必要がある。また、それに合わせて、学活や総合、道徳などの年間計画も年度当初に立てなければならない。 学年、学級での球技大会やレク大会を、生徒に企画、立案、運営させる。演劇に代わるものとして、学活などで寸劇大会をする、道徳や教科指導の中でロールプレイを取り入れて、他者理解、心情理解が深まるような学習形態など、新たな学びの手法を工夫する必要がある
④ ノー部活デー（木曜日と土日いずれか）による心身ともゆりのある中で、効率的、効果的に部活動を行い、自発的・自主的に心身を鍛える生徒を育成する。	○どの部活動も計画的に活動を行い、ノー部活デーを守り活動することができた。来年度以降は部活動の地域移行による移行期に移るためより効率的に、効果的に活動する必要がある。	平日2時間程度、土日いずれかの4時間程度の練習時間の中で、より効率的、効果的な活動が求められる。生徒もそうであるが顧問も生徒が、より自発的、自主的に行動ができる活動するのが楽しくなるような部活動にしていく必要がある。

(3)存在感や成就感を大切にした生徒指導	成果と課題	改善策
① 生徒が存在感を実感する中で自己指導力やコミュニケーション力を高めるよう、学習指導と関連付けながら命と人権を根幹に据えた開発的生徒指導を進める。	○対話を基本とし、生徒の内面理解を進めるための生徒指導や、行事を中心に生徒自身が存在感を感じることができる取り組みを進めることができた。 ●コミュニケーション能力が低く、すぐに手が出てしまう生徒がいるので、ソーシャルスキルを身につけ、同じ失敗を繰り返さないように指導を続けて行く必要がある。	コロナウイルスなどの影響はあるが、学活、総合などの時間を有効活用し、クラスの居場所づくりや仲間づくりなど、内面に寄り添えるよう計画的に行う必要がある
② 学年担任制による多様な相談体制、ＩＣＴによる迅速な調査、スクールカウンセラーとの連携など、ガイダンスとカウンセリングの双方から、問題行動、不登校等の未然防止、早期発見・対応する。	○学期に１回の教育相談では期間を１週間に設定し、生徒との対話の時間を十分に設定することや、担任の先生以外にも、生徒の相談しやすい先生を選択できるようにするなど、生徒の相談しやすい場の設定を行うことができた。１年生に向けてはスクールカウンセラーからのガイダンスを行った。また、早期にスクールカウンセラーに相談するなど、早期発見、早期対応することができた。またスクールカウンセラーとも情報共有を密に行うことができた。 ●早期発見、早期対応はできたが不登校生徒の新規の生徒を減少させることはできなかった。	市内的にも増加している不登校に対して、現在行っているＵＤの研修での学びを、各教師が教室毎、授業ごとに意識して行うことができれば、生徒の困り間を緩和し、安心につながると考えられる。また、担任の教師以外にも関わられるような取り組みを継続していく必要がある。
③ 学校基本方針や生徒会「No Moreいじめ宣言」により、いじめの定義や実態を啓発し、家庭・地域・関係機関と連携したいじめ対応を進める。いじめアンケート、生活ノート等は、複数の目で点検をし、小さな変化を見逃さず、いじめを積極的に認知し、早期解決を図る。	○「No More いじめ宣言」については生徒に共有することができた。また、保護者にも学年通信や学校便りなどで周知することができた。 <u>いじめについては積極的に認知を行い、１００％解消に至るよう素早く丁寧に学年の先生を中心に解決に向けて取り組むことができた。また、生活ノートなどの何気ない一言から相談を積極的に行うなど、問題が大きくなる前に声かけ、相談が行えた。</u> ●いじめを認知して保護者に伝える際に、保護者がいじめの定義を理解されていないことがあり、加害生徒の保護者がいじめとして認知されるのに時間がかかった事例があった。	全教師同じラインで指導を行うことが基本であるため、生徒指導委員会での確認事項、共通理解事項については学年会議や朝の打ち合わせを活用し、必ず共通理解を図る。
④ 生徒指導方針、いじめ防止基本方針を発信し、地域と一体となった生徒指導を進めるとともに、警察、福祉、医療等の関係機関と連携しケース会議等による組織的・計画的な個別支援を行う。	○警察、福祉、医療と連携して生徒指導を行うことができた。 <u>また、ケース会議を行い、実践事例として他の生徒にもきめ細かく対応できるように取り組んだ。</u>	現状の取り組みを継続できるように学校全体での共通理解を図る。
⑤ 情報技術の仕組み、個人情報、肖像権や著作権の権利、端末利用によるトラブル等を正しく理解させるとともに、保護者と連携し使用時間や使用目的等の利用実態を的確に把握し、関係機関を活用しながら、デジタルシティズンシップ教育を進める。また、相談機関を生徒・保護者に周知する。	○１学期、２学期の終業式には警察の方に来て頂き情報機器の取り扱いについて、また、情報機器の取り扱いによって起こるトラブルについて講演して頂いた。また、講師を招聘しての情報モラル講演会も行い、注意喚起を行うことができた。 ●学校で生徒会が定めている情報機器使用３か条にがかなり前のものになっており、 <u>市内中学校での共通理解事項は確認を行ったが、改正には至っていない。</u>	スマートフォンの活用については生徒のみならず、保護者や教師にも新しい知識を得るために研修を実施する必要がある。また、新生徒会のメンバーを中心に情報機器使用３か条を新しくつくる。学校内でのクロムブックの使用についても、もう少し細かくルールを決めるなど、よりよい活用のためにデジタルシティズンシップ教育を進める。また、１人１台端末になったことによる校内でのＳＮＳの使用やブラウザゲームの使用についても学校として取り組む必要がある。
(4)豊かな人間性・社会性を育む道德教育、人権教育	成果と課題	改善策
① 他者や自己との対話による「特別の教科 道德」を要とし、教育活動全体で、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道德性を養う。（中心発問の精査・評価を含めたローテンション授業の実施 保護者・地域への公開）	○学年内でのローテーション授業によって、道德の授業の充実を図ることができた。 ○過去数年間の研修によって、生徒の意見をうまく聞き出そうとする教師が増えた。 ●特別の教科となり、教科書・指導書の授業でパターン化されつつあるが、さらなる道德の授業力向上のため、道德研修の実施が必要。	学年内でのローテーション授業が浸透しているので、互いに授業見学し、指導力を高めていく。また、校内・学年内での研究授業など、負担になりすぎない程度で授業公開し、指導力向上を進めることができる。
② 人間尊重の精神や生命に対する畏敬の念を具体的な生活に中に生かせるよう、全教育活動を通じて命と人権の大切さを教え、共に生きる心を育む。	○人権講演会や人権ミライエプロジェクトに関心を寄せ、参加する教職員が多かった。ただし、参加する生徒、教員の固定化になってしまう傾向があった。	人権ミライエプロジェクトについては、「人権学習」のスタイルを大切にしながら、活動内容を工夫して、参加を促すものにする必要がある。
③ 地域に根ざした伝統芸能や多様な芸術を鑑賞したり、地域貢献活動に参加したりすることにより、ふるさと「丹波篠山」を愛する心を培い、我が国や外国の文化・伝統を理解し、尊重し合う生徒の育成を図る。	○芸術鑑賞会として「音楽企画LARGO」を招待し、バイオリンなどの生演奏を聴くことができた。 ○四つの力委員会では、生徒会役員が地域の方と交通マナーや挨拶、防災について協議することができ、中学生として地域のためにできることを考えることができた。 ○地域の方よりあいさつをしているとの評価をいただいている。	四つの力委員会であるさと教育について検証改善しながら取り組んでいく。
(5)将来や社会の糸口をつかむキャリア教育	成果と課題	改善策
① 職業構造の変化や新産業の創出、SDGs等も踏まえつつ、学ぶことと将来や社会とのつながりの中で自己の生き方を考え、社会的・職業的自立に向けた資質・能力や社会参画する意欲・態度を育む。	●総合学習の年間計画に福祉教育が明確に位置づけられておらず、系統だった指導ができるとは言えない。	理論を学び、考え、体験することで感じ取り、それが実践力に繋がるような体系を作らないと本来のキャリア教育には繋がらない。 それぞれの行事や体験を単発で行うのではなく、体系だてて計画する。
② 生徒が能動的に生き方を考え、自らの意思と責任で自らのよさを生かす進路を選択できるよう、キャリア・パスポートを有効に活用し、キャリア形成に資する個に応じた組織的・計画的な指導を行う。	○コロナ前の５日間のトライやる・ウィークが実施できた。	
③ ライフプランを含めたキャリア教育を通じて、主体的に生涯の生活を設計し、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）や、社会における自分の役割、自分らしい生き方について考えさせる。	○夢プランに参加することで、市内の高校の情報が分かり、進路に対する意識が高められた。	
④ 体験活動のねらいを明確にし、事前事後指導を充実することを通して、地域の人々とつながりを深め、勤労・奉仕等を尊ぶ心や、社会の一員としての自覚、社会参画への意欲、態度を養う。	●入学当初からの３年間で計画的に進めていく必要がある	

(6)基礎力・思考力・実践力を育む学習指導・授業改善	成果と課題	改善策
① 授業スタンダード(予習・目標理解・個人思考・集団思考・振り返り)に基づき、各教科等の見方・考え方を創発し、個と集団を思考が行き来する「主知的・対話的で深い学び」を進めるとともに、生徒が自らの学習を振り返り次の学習に向かうことができるよう指導と評価の一体化を図る。	○授業スタンダードを意識した授業を各教科担当が意識して行うことができた。また個人思考、集団思考に関して、教師が意図的に授業に組み込むようになってきていることで、 <u>個人と集団の対話的交流による深い学びにつながった。</u> <u>さらに、ユニバーサルデザインの研修を通して、視覚的支援、人的支援等を取り入れ実践共有を繰り返すことで分かりやすい授業を実施することができた。</u> ● <u>授業の振り返りが、次の学習にうまくつながっていない生徒がいる。</u>	振り返りの時間に個別支援などを行うことで、自己の課題を明らかにし、次の授業へつなげられるようにする。
② 空間的・時間的制約を緩和するＩＣＴ環境等を用いて、知識・技能の定着を図る「個別最適な学び」、仲間の考えから自己の考えを深める「協働的な学び」、自己の学びを改善し、推進し続ける「主体的な態度」における学びの質を高める取組を推進する。（休校時等：家庭学習支援の双方向機能活用）	○クロムブックの活用が、この１年間で飛躍的に伸びた。各教室に大型テレビや接続ケーブルなどの環境が整ったことで、スムーズに授業での使用ができるようになった。 <u>いろいろな場面でクロムブックを使うことができ、主体的な学びや協働的な学びにつながっている。</u> ●教員間のスキルの差がある。 ●デジタル教科書の使用については、十分に活用できていない部分もある。	0JTによって教員のスキルアップを行い、使用頻度を増やしていく。 デジタル教科書の活用については、効果的な使用方法についての検討が必要である。
③ 知識・技能が他教科等や生活で活用できるよう、見通しのある予習、振り返りのある復習を含む家庭学習に係るガイダンスや課題の個別化、放課後学習の充実を図る。	○問題解決能力等の生活に活用できる学習を、各教科の中で取り組むことができている。 ○がんばりタイムは今年も計画的に取り組むことができた。 ● <u>予習に関して、まだまだ定着がみられず、教師と生徒の間に意識の差がある。</u> ● <u>放課後学習は業務改善、部活動等の視点からも、現実問題時間の確保が難しい。</u>	予習にふさわしい、または興味深い教材をストックして共有していく。また家庭学習の方法を年度初めに提示し、積み重ねていくことで定着を図る。 ICTを活用した家庭学習のあり方を検討していく。小学校の家庭学習との連携性を図る。
④ 新学習システムを活用した少人数指導や補充的な学習、発展的な学習など、系統性を重視したつまずきの解消を図り、個に応じ個が生きる個別最適な学びの授業改善を進める。	○少人数授業を行うことで、質問しやすい雰囲気を作り、個別に最適な学びを実現することができた。また、学習面だけでなく精神的に不安定な生徒を支えることもできた。 ○３年生数学では、１，２年生の内容を復習しつつ、個に応じた学習指導ができた。 ○同室複数指導では、支援が必要とする生徒に寄り添い、全体の中で会話練習やインタビューテストに向けての練習を行うことができた。苦手意識をあまり感じることなく授業を受けることができていると思う。 ●家庭学習等の学習習慣を身につけさせることが難しい。 ●「主体的に取り組む態度」の評価について、「粘り強い取り組み」と「学習の調整」という二つの側面からより具体的に評価を工夫する必要がある。	年度初めに授業のルールを生徒と一緒に確認し、自ら考える姿勢や復習、家庭学習の習慣を身につけることが学力向上につながるということを意識させる。 「主体的に取り組む態度」の評価について、「粘り強い取り組み」と「学習の調整」という二つの側面からより具体的に評価を工夫する。
⑤ 特別支援教育を中核に据え、教育支援計画における合理的配慮と一貫性のある支援、及びユニバーサルデザインについて、全教職員の共通理解のもと組織的にＰＤＣＡサイクルを推進し、豊かな人間関係づくりとともに伸びる力を育成する。	○特性を理解した上での対応により、安心して学校生活を送ることができている（篠友） ○ユニバーサルな学校づくり（人的・教室環境・授業のＵＤ化）について月１回ペースでミニ研修を実施し、実践の共有を進めることができた。 ●特別な支援を必要としている生徒が多く、特に、特性が弱い（「グレー」の）場合は、サポートファイル、検査歴等を見過ごさないようにする必要がある。	学年特支担当は、年度はじめに特支Co.が提示する学年別の支援一覧を把握しておき、生徒指導、学習指導等に関して、特支の視点からの気づきを学年全体で共有できるように進めていく。また、学年特支－篠友－養教－生指－特支Co.の一層の連携を図る。 （情報共有を密にする） ユニバーサルデザインな学習を展開するためのプランを考え、実施し、成功例の共有化を図る。（ユニバーサルデザイン研修のステップアップ）
⑥ 授業時数を確保し、言語能力（英語によるコミュニケーション能力を含む）、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力や現在的な諸課題に対応する資質・能力を教科横断的な視点で育成する。	○授業時数は確保している。 ○クロムブックを使いながら、課題解決型の授業や、コミュニケーション能力・情報活用等の能力を高めることができた。 ○（特別支援学級）通常学級と進度を遭わせることができた。 ●（特別支援学級）進度は合わせたが、基礎力を中心としたので、応用力をつけることについては、工夫が必要。 ○コロナ感染対策をとりながらも、クロムブック（ジャムボード）を用いて、対話的なグループワークや、課題解決型の学習ができた。 ○防災教育を中心に教科横断的な学習を進めることができた。 ●教師の情報活用能力を向上させる必要がある。	各教科で情報機器を活用しながら、様々な能力を向上させようとする取り組みを行うことはできたが、教科の枠組みを超えた取り組みができるようにするため、各学年の教科担当連携をとり、関連のある分野を話し合う。
⑦ 読書への興味を深めるとともに、創意工夫して読解力向上の取組を推進する。	○図書館だよりの発行や学年文庫，学級文庫の設置などにより，朝の学習移行後も大幅な学校図書館利用者の減数をおさえることができた。 ●蔵書を活用した授業の実践はほとんどできず、ICTの活用に合わせて、読解力向上への取組を進める必要がある。	蔵書を活用した授業に関する研修を設ける。生徒が個人の読書に留まらずに、ビブリオバトルやブックトークなどで周り と本を通じて交流する機会がもてるように教科担を中心に声かけする。

(7) 支え愛に満ちた活気あるコミュニティ・スクール	成果と課題	改善策
① ホームページ、学校だより、オープンスクール等により、めざすべき子ども像や教育活動の目標や内容を具体的に説明し、家庭・地域の参画を促進する社会に開かれた教育課程を進める。	○毎日のホームページ更新や毎月の学校便りの発行など、生徒にかか る学校の情報を、適宜発信することができた。	四つの力委員会の開催について、感染に 注意しながら地域の方々と意見交流する 場を設定し、生徒と学校生活や将来につ いて話し合いできるような機会をもつ。
② 生徒会と学校地域運営協議会が協議する「四つの力委員会」によ り、社会や将来の糸口となる、夢・やりがい・やすらぎ（安全安心）を 体感する教育を進める。	○「四つの力委員会」では、オンラインや対面により生徒と運営協議 会の方とで、 <u>学校生活についての情報交換や、コロナ禍における災 害避難について検討し、避難時のポイントを作成した。避難場所の 事前確認、家族やお年寄りの安全確認、非常持ち出し袋の用意、情 報の把握、避難所での助け合いなど、主体的に課題に取り組み、解 決する体験ができ、中学生の聞き取る力と前に立って発表する力が 伸びていること、地域と話し合う貴重な機会となっていることにつ いて評価を得た。</u>	
	○学校運営協議会と連携を取り、外部から講師（BEET、田舎の窓）を 招き、 <u>パワポ作成のポイントやキャリア教育の観点からも将来に向 けて有意義な講演を実施できた。</u>	
③ 学校地域運営協議会の協力のもと、教育課程の評価改善や、人的物 的支援などについて、I C Tを活用した社会との連携も行いながら、カ リキュラムマネジメントを効果的に進める。		
④ 小・中・高等学校の連携を密にし、児童生徒・教職員・地域の交流 を通して、地域の学校としての学びと育ちの連続性を確立する。	○入学者説明会をオンラインで行い、コロナ禍でも工夫して実施でき た。部活動体験は割愛した。	入学者説明会は、オンラインを継続し、 出前授業を中学校で実施して校舎見学や 中学校生活の雰囲気味わえるよう工夫 する。部活動見学は、入学者説明会時に は実施しない方向。
(8) 由ごろで子どもとともに学ぶ教職員組織	成果と課題	改善策
① 教育は“今日行く”を行動の基本におき、生徒・保護者・地域住民 のつぶやきに敏感に気づき、複数で即時即日対話し、課題と改善の方向 性を共有する。（素早く丁寧に、そして笑顔で）	○コロナ禍でオンラインを活用するなど、工夫をしながら保護者、 地域とのつながりをもって授業、学校行事を実施した。生徒指導 についても、素早く丁寧に、そして笑顔でをモットーに取り組み めた。 ●いじめ対応など、生徒指導に係る対応での情報共有やチェック体 制を再度確認する。	重要文書のダブルチェックや計画的な取 り組みについて、再度確認し、教育活動 を丁寧にすすめる。
② 兵庫県資質向上指標により育成目標を重点化し、学年担任制、一人 一研究授業を通じ、保護者や地域の期待に応えられる豊かな人間性、専 門性と実践的指導力の向上をめざし、研究と修養に努める。	○毎職員会議でのユニバーサルデザイン研修を実施。防災教育の 一人一回の研究授業や学年での道徳研修、生徒指導や特別支援の OJTなど資質向上に向け取り組めた。 ●職員が人事異動により代わっていくことで、危機管理意識や生徒 指導・不登校の未然対応意識や初期対応など、薄れていかないよ う職員会議などでの振り返りや研修が必要と感じる。	ユニバーサルデザイン研修をすすめ、授 業研究を計画的に実施し、資質向上に資 する。
③ 法令、社会通念に基づき、非違行為は教職員全体の信用・信頼を損 なうことを深く理解し、教職員としての誇りと責任をもって自己の行動 を律するとともに、情報化、グローバル化など社会の変化に対応した教 育観を培う。（職員申し合わせ事項の実行）	○職員会議、朝の打合せなどで随時確認し、教育公務員として適切 な対応、行動を心がけるよう意識できた。	非違行為等を起こさず、信頼される学校 づくりのための個々の意識を高める。
④ ④ 1人1台タブレットを利用した校務・業務の効率化・情報化、事務 作業精選、バック・キャスティング（ゴールを精選し、逆算して計画） による教育活動、会議の効率化（会議資料の事前配布）、ノー部活デー （木曜日と土日いずれか）や定時退勤日の徹底、記録簿によるタイムマ ネジメント、計画的な年休取得などワークライフバランスの保持と勤務 時間の適正化を進める。	○ノー部活デーの実施、職員会議の効率的な実施のための工夫を それぞれ実施できた。 ○外部の講師を複数回招き、 <u>教職員のICT端末の活用能力の向上に 取り組めた。グーグルのクラスルームの活用など教職員のICT活 用能力の向上があった。またクラウドでの生徒の出席記録や掲示 板、コロナでのLIVE配信対応、さらに部活動の朝練習の廃止な ど、教職員の校務の効率化に向け努力できた。</u> ●多忙化の解消に向けてさらに業務改善を進める。	・学校行事や教育活動など（体育祭・文 化祭）の開催方法の工夫 ・教育関連文書などの精選 ・業務を計画的に進め、タイムマネジメ ントの徹底